

『身代わり王子の純愛』

著：剛しいら

ill：周防佑未

テレビ収録は上手くいった。誰も殿下が別人だと気がつかなかったようだ。

広夢はその後、DVDでイーシュダット殿下の姿をずっとヒカルに見せながら、王族らしい動き方を教えてくれた。この王宮内にいる誰の言葉も聞きたくないけれど、広夢の言うことだけはちゃんと聞ける。ヒカルは広夢の期待を裏切りたくなかった。

「よく頑張ったね。明日は、バスケットの練習をしているところを収録するように、ムライさんに頼んだから」

「バスケッ……学校で少しやってたよ」

「そうか。俺もずっとやってたんだ。それじゃ、楽しみはまた明日ってことで、今夜はこれで失礼するよ」

「待って……もういっちゃうの？」

広夢には別室が用意されている。それは知っていたが、離れなければいけないと思うと、途端に不安になってきた。

「夜食も食べたし、後は、シャワー浴びて寝るだけだ」

「オレは、オルガ中將に見張られながら、風呂入るんだよ。寝るまで見張られてるし。

それ、すごく嫌なんだ。お願い、広夢。寝るまで、側にいて……」

「いいよ、分かった。それじゃ、ゆっくりお風呂に入っておいで」

「ねっ、バスルーム、ものすごく広いよ。そうだ、ベッドもあんなに大きいし。広夢、このままずっとこっこの部屋にいて」

無理なことを頼んでいるとは分かっている。けれどどうしても広夢と離れたくなかった。

ここに連れてこられてから、初めて心を許せる相手に会えたのだ。広夢の前では、萎縮することなく、自分のままでいられるのが嬉しい。

「それは……許可が出るかな。いくらなんでも、王子と同じベッドで寝るのはまずいだろ」

「それじゃここに、別のベッドをもう一つ、運んでもらえばいい……」

「そんなに俺と離れるのが不安なの？」

「うん……怖いんだ。病人のふりしてただ寝てるだけならいいけど、これからはずっといろんなことしないとイケないんでしょ？ オレなんかに出来るのかな。失敗したら刑務所に入れられそうで、怖くてたまらない」

イーシュダット殿下はいつ帰ってくるのだろう。何日、代役を務めなければいけないかも聞いていない。長くなればなるほど、ばれてしまいそうで怖い。

似ているのは顔や体付きだけだ。頭の中身は、とても殿下と呼べるような人間じゃない。広夢がいなかったら、今日喋ったようなことも思い浮かばなかつただろう。

そう考えると、ヒカルは不安でたまらなくなってくる。

ついに耐えきれなくなって、思わず広夢に抱き付いていた。

「怖がらなくてもいいよ。分かった。オルガ中將に言って、今夜はここで一緒に寝るから」

「ほんと……側にいてくれる？」

「いるよ。待ってて……」

広夢はそのまま、警護の兵がいる控えの間に向かった。

イーシュダット殿下の部屋は広い。寝室だけでも、二家族が暮らせそうだ。それより広い居間があり、さらに食事室と書斎、ジムのような設備のあるスポーツルームと、テラスにはプールまであるのだ。

バスルームには、ジャグジー機能の付いた大きなバスタブがあり、シャワーブースも二つある。置いてあるアメニティは、すべて外国製の高級品だった。

クロゼットも大きい。そこには外国のブランドの服が、ずらっと吊るされていて、まるでショーパブの楽屋のようだ。靴も大量にあって、ヒカルの店のダンサー全員に履かせても余るくらいだった。

イーシュダット殿下は、靴を盗まれる心配なんてしたことがないのだろう。たった一足の靴を履きつぶし、やっと買った新品は盗まれないために履いて寝る。そんな暮らしをしているヒカルにしてみれば、似たようなデザインの靴を、何足も持つイーシュダット殿下の気持ちが分からない。

これまでは、毎日ショーのことだけ考えていた。だが世界は一変してしまった。そうだった途端に、ヒカルには考えないといけないことが山ほど出来てしまった。「オルガ中将の許可を取ってきたよ。ついでにパジャマと、明日の着替えを貰ってきた。酷い話さ。荷造りする余裕もくれなかったんだから。何も持ってきてないんだ」「貰っておけばいいんじゃない？ 王室は、信じられないくらい金持ちだもん」「そうだな……。とんでもないギャラくれたし……。『それでは、風呂に入ることを命じる』」

突然広夢は、オルガ中将の口調を真似する。そこに本人がいるのかと思うほど、そっくりだった。

ヒカルはゆっくりと頷く。二度と広夢の前では、すげえなんて下品な言葉は口にしない。教えられたことを、すぐに覚えられる程度の頭はあると知って欲しかったのだ。「本当に広いな」

バスルームに二人して入った途端、広夢は感想を口にした。そしてジャグジーに、勢いよく湯を入れ始めた。

「テラスにはプールもあるよ。綺麗な水は貴重なのに、ざぶざぶ流れてるんだ」「水を王宮内でうまく循環してるんだろ。思ったより、いろいろと最新式なんだ。雨水や井戸水を、効率的に利用してるみたいだね」

続けて広夢は、脱衣スペースで服を脱ぎ出す。すると逞しい体が現れた。

ヒカルは思わず目を逸らす。店では、ダンサーの女の子達の半裸の姿を、いつも間近で見ている。そのせいか女性の裸を見ても、特別興奮するようなことはない。

それよりも特別ゲストで呼ばれた、力自慢の男達や、ボディビルダーの体を見るとドキドキした。

広夢の体は、そこまでマッチョじゃない。けれどスポーツマンらしい、手足の長い筋肉質な体をしていた。

「疲れた。こんな時には、ジャグジーが最高だな」

すぐに広夢はシャワーを軽く浴びて、ジャグジーに入ってしまった。

「オレ……いつも、シャワーしか浴びない。部屋にはバスタブないんだ」

「日本人って、特別風呂好きなんだよ。水に恵まれてるから、風呂で水使うことにあまり罪悪感がないんだ。水に不自由している国のほうが多いのにな。これは反省すべきところだ」

「水に困らないの？ この国は、よく断水するよ。オレ、こんなところに入るの初めてだ」

おそるおそるジャグジーに入ってみた。ぶくぶくと気泡が出ていて、それが全身を刺激する。変な感じがして、ヒカルはすぐに広夢に抱き付いてしまった。

「ひゃあっ、何でこんなところにわざわざ入るの？ 気持ち悪いよ」

「水流が筋肉の凝りを解してくれるんだよ。いいか、じっとしててごらん。病人のふりしでずっと寝てたから、体の調子よくないだろ？」

「うん、踊ってないから、体が重く感じる」

「そういう固まった筋肉を、解してくれるんだ」

広夢はヒカルを抱きかかえるようにして、ジャグジーの中でじっとしている。そんなことをされると嬉しいけれど、やはり何だか恥ずかしくて自然と顔を俯けてしまった。

「熱い？」

「ううん……平気……だけど、変な感じだね。イーシュダット殿下は、こんなところに毎日入ってるのかな」

「そりゃ入るだろ。王子は、いろいろと忙しい。お疲れの筈だ」

「そうだよ。テレビに出るだけが、イーシュダット殿下の仕事じゃないものね」

「まだ新しい国だから、諸外国との外交関係をうまくやったり、外国企業を誘致したり、いろいろとすることはあるんだろうな」

ずっと広夢の手が離れた。広夢は長い腕を、ジャグジーの縁に沿わせて、うっとり目を閉じている。

何だか腕が離れると寂しい。だからヒカルは、そっと広夢に寄り添った。

「俺の夢はね。いつか、ラスベガスのショーに出ることなんだ……」

目を閉じたまま、広夢は呟く。

「日本で成功するのももちろん夢だけど……もっと語学力を高めて、世界に通用するエンターティナーになりたい」

「広夢だったらなれるよ……ガライ語だって、すぐに覚えたくらいだし、頭いいから」

「日本で稼いだら、アメリカに行きたいな。ショーをたくさん見て、いろんなところのオーディション受けて……。なあ、ヒカルの夢は何？」

目を開いて、広夢はじっとヒカルを見つめて訊いてきた。

夢なんて考えたこともなかった。けれど今なら、少しは夢らしいものも浮かんでくる。

「外国、行ってみたい。国内はショーで回ったことあるけど、他の国に行ったことないから。日本はどんなところ？」

「いつでもおいで。俺の家に泊まればいい。王子のクロゼットくらいの広さしかない、狭い家だけど」

「でも、オレの部屋より広いよ」

広夢の肩に頭を寄せ、うっとりとしていた。けれどそのうちに、頭がぼうっとしてきた。

「何か……ふらふらする」

「慣れない風呂でのぼせたかな。出たほうがいい」

先に広夢はジャグジーを出て腰にバスタオルを巻くと、ヒカルの腕を取って立たせてくれた。けれどそこまでが限界だった。上がったものの、その場でヒカルは床に崩れ落

ちてしまったのだ。

「ごめんな。つい、日本人の感覚で長湯してみたんだ」

ヒカルの腕に、広夢の腕が絡まった。と、思ったら、ヒカルの体は軽々と抱き上げられていた。そのまま広夢は、寝室へと急いでいる。

本文 p56～64 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>